二〇一七年度大学入試センター試験　解説〈現代文〉

第1問　評論　小林傳司「科学コミュニケーション」による

[総　括]

第一問の「評論」は、昨年に比べると本文量が二割近く増加し、四〇〇〇字を超えた。また、一昨年、昨年ともに受験生になじみのある現代的テーマの文章であり、文体も「です・ます」体であったものから、今年は「である」体で硬質な評論、しかも理系の筆者による本格的な「科学論」になっただけに、読解に時間がかかった受験生も多かったのではないだろうか。

文章の構成としては、近代科学の成立した十六世紀から二十世紀後半の現代にいたる科学－技術の社会における位置づけの変遷を述べた後、科学社会学者のコリンズとピンチが「もっと科学を」という近代の状況に投じた一石とその内容について紹介し、その問いかけを筆者がより深く考察し、批判していくという流れになっている。受験生としては読解に時間をかけすぎないよう注意したいところだ。

設問別では、**問1**の漢字は実力が問われる問題が並んだ。**問2**～**問5**までは、傍線部の説明問題で標準レベルが並ぶ。昨年出題された**問5**のような、生徒が「誠実さ」を話題にして発言をしている中から正解を選ぶ問題は出なかった。**問6**は、昨年同様「小問2題構成で各1つを選ぶ」形式だった。(i)では文章の表現を問い、(ii)では文章の構成・展開を問うているが、両方とも「適当でないもの」を選ぶ点が特徴的で、気を付けたいところだ。

[解　説]

問1　漢字問題　基本～標準

(ア)の正解の⑤「旧に倍した」は「これまでよりもいっそう、程度を増すこと」の意。(イ)の「起因」は「物事の起こった原因」。(ウ)の「厄年」は「厄災が多く降りかかるとされる年齢」のこと。(エ)の「宣告」は基本漢字なので、正解を選ぶのは容易なはず。(オ)は「訓」の漢字を「音」で解答する問題。意味を理解していないと解けない点で、日頃から漢字に関して多角的な勉強を積み重ねておくことが望ましい。消去法でも解けなくはないが、このレベルの漢字に関してはすべて自力で書ける力を付けておいてほしい。

傍線部(ア)～(オ)に相当する漢字を含む物を、それぞれ選べ。

(ア)　倍増　①培養　②媒体　③陪審　④賠償　◎⑤倍した
(イ)　要因　①動員　②強引　③婚姻　④陰謀　◎⑤起因
(ウ)　厄介　①利益　②通訳　◎③厄年　④躍起　⑤薬効
(エ)　宣告　◎①上告　②克明　③黒白　④穀倉　⑤酷似
(オ)　癒やされる　①空輸　②比喩　③愉悦　◎④癒着　⑤教諭

正解　(ア) 1　⑤　(イ) 2　⑤　(ウ) 3　③　(エ) 4　①　(オ) 5　④

問2　傍線部説明問題　標準

傍線部A「先進国の社会体制を維持する重要な装置となってきている」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを一つ選べ。

傍線部の前後の読解と、傍線部自体の意味を正確に理解して解く問題。

第1段落で、近代科学の成立した十六世紀から十九世紀、そして二十世紀にいたる科学－技術の社会における位置づけの変遷が書かれている、そこでは、かつて科学は「伝統的な自然科学の一環としての、一部の好事家による楽しみ」であったものが、「科学者」によって「知識生産」へと変容し、さらに科学が技術的な威力と結びつくことによって、「国民国家の競争」において「重要な戦力」となったことが述べられている。

次に**第2段落**で、科学技術の営みの存在は膨張し続け、二十世紀後半ではＧＮＰの二パーセント強の投資を要求するものになっており、かつてのような自然哲学的な性格を失っていることが述べられた直後に、傍線部A「先進国の社会体制を維持する重要な装置となってきている」が引かれ、その説明が求められている。

さらに**第3段落**まで読み進むと、二十世紀後半の科学－技術は、「社会の諸問題を解決する能力を持って」いるだけでなく、さらに「自然に介入し、操作する能力の開発に重点が移動している」ことが述べられている。

ポイントとしては、「近代科学の成立期当初の科学と現代の科学－技術との違い」を正確に説明してあること、また傍線部に述べられている「先進

国の社会体制を維持する重要な装置」の正しい説明になっている選択肢を選ぶことにある。

選択肢を見ていくと、①の前半部分は問題ないが、「先進国としての威信を保ち対外的に国力を顕示する手段となる」という箇所が×。科学－技術は単なる「威信」や「国力を顕示」するためではなく、第3段落で見たように、「社会の諸問題を解決する能力を持って」いる。

②も前半は問題ないが、後半の「国家に奉仕し続ける任務を担うものへと変化している」がおかしいので×。

③は、中盤の「為政者の厳重な管理下に置かれる国家的な事業」という内容が本文にはなく×。**本文に書かれていない内容は、許容される言い換え表現でなければ×になるというのはセンター現代文の鉄則だ。**

④は、前半で書かれている「『もっと科学を』というスローガンが説得力を持っていた頃」というのは、ここで対比されている「かつてのような」自然科学的性格を持つ科学ではなく、十九世紀から二十世紀前半のスローガンである点が×。また、「経済大国が国力を向上させるために重視する存在」というのも×。ここでは「社会体制を維持する」ための重要な装置なのであって、「国力を向上させる」ためではない。

⑤の前半「人間の知的活動という側面を薄れさせ」は傍線の直前の内容の言い換え、「自然に介入しそれを操作する技術により実利的成果をもたらす」は第3段落の内容と合致、後半の「国家間の競争の中で先進国の体系的な仕組みを持続的に支える不可欠な要素」は、第1段落で指摘した内容と、傍線部自体の言い換えを含む説明になっている。正解は⑤。

なお、**傍線部の「先進国の社会体制を維持する重要な装置」の言い換えを選択肢で探すと**、①「国家の莫大な経済的投資を要求する主要な分野」、②「国家に奉仕し続ける任務を担うもの」、③「先進国間の競争の時代を継続させる戦略の柱」、④「経済大国が国力を向上させるために重視する存在」という説明は、いずれも不適といえる。⑤の「先進国の体系的な仕組みを持続的に支える不可欠な要素」だけが言い換え許容の範囲であるが、これだけで正解と決めるのは危険なので、傍線部前後の読みを徹底して正解に至ってほしい。

正解　6　⑤

問3　傍線部説明問題　基本

傍線部B「こうして『もっと科学を』というスローガンの説得力は低下し始め、『科学が問題ではないか』という新たな意識が社会に生まれ始めているのである。」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを一つ選べ。

傍線部中の指示語の指し示すものを正確にとらえることと、傍線部自体の意味をしっかり理解して解く問題。まず、傍線部の冒頭が「こうして」という幅広い指示語であることに着目する。

●傍線部中、あるいは傍線部の直前に指示語がある場合、まずは指示語問題として解く。

これはセンター現代文で最頻出であるにとどまらず、どの大学の現代文においても重要な解法の鉄則であり、大切なパターンである。

「こうして」という指示語は「これ」や「それ」などと違って、複数の具体的な内容を指し示すものだ。ここでは、第3段落に書かれている二十世紀前半から後半にかけての「科学－技術」の変化、特に「両面価値的存在」の具体的な中身をつかめば正解できる。

1　科学は技術と結びつくことで自然に介入し、操作する能力の開発に重点が移動した結果、病や災害といった自然の脅威を制御できるようになってきた。

同時に（両面価値的存在）

2　科学－技術の作り出した人工物が人類にさまざまな災いをもたらし始めている。

この二つの要素を満たし、かつ傍線部の説明にもなっている選択肢は④で、これが正解だ。

①は、後半の「自然に介入しそれを操作する能力の開発があまりにも急激で予測不可能」が本文に書かれていないので×。また「その前途に対する明白な警戒感が生じつつある」というのも、傍線部の「『科学が問題ではないか』という新たな意識」の説明としておかしい。

②は、後半の「営利的な傾向……に対する顕著な失望感が示されつつある」が説明としてズレている。ここでは、「科学－技術の作り出した人工物が人類にさまざまな災いをもたらし始めている」ことに対する疑問であって、「営利的な傾向」に対する失望感ではない。

③は、後半の「（人工物を作り出すようになった科学の）方法に対する端的な違和感が高まりつつある」も、②と同様、傍線部の説明になっていないので×。

正解の④は、前半はポイント1と対応していてＯＫ、後半の「人工物が各種の予想外の災いをもたらすこともあり、その成果に対する全的な信頼感が揺らぎつつある」という説明もポイント2と傍線部の内容を押さえていてＯＫだ。

⑤は、後半の「科学は、その新知識が市民の日常的な生活感覚から次第に乖離するようになり、その現状に対する漠然とした不安感が広がりつつ

ある」が、ポイント1と2の両方からズレた説明になっていて×。

なお、この問題も問2に引き続き、傍線部の「『科学が問題ではないか』という新たな意識」の言い換え説明を選択肢に求めると、一気に選択肢を絞ることが出来る。

傍線部中の「科学が問題ではないか」というのは、これまでの科学に対する全幅の信頼が揺らいできたことを示しているが、全否定しているわけではない。したがって、①「前途に対する明白な警戒感が生じつつある」、②「その傾向に対する顕著な失望感が示されつつある」、③「その方法に対する端的な違和感が高まりつつある」、はいずれも強過ぎる表現になっており、×。「科学が問題ではないか」というのは、科学に対して漠然とした不安を抱き、部分否定的な態度をとることなので、④「その成果に対する全的な信頼感が揺らぎつつある」、⑤「その現状に対する漠然とした不安感が広がりつつある」、の二つに絞ることが可能だ。

正解　7　④

問4　傍線部説明問題　標準

傍線部C「ゴレムのイメージに取りかえることを主張したのである」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを一つ選べ。

「ゴレム」という怪物が「何の」「どういう」たとえなのかをつかんで解答する。

科学社会学者であるコリンズとピンチが、「もっと科学を」という現状に対して一石を投じるために著した本が『ゴレム』である。まずは、第5段落で登場する「ゴレム」が何のたとえになっているかを本文で正確にとらえよう。

●ゴレム……ユダヤの神話に登場する怪物

⇒魔術的力を備え、日々その力を増加させつつ成長する。人間の命令に従い、人間の代わりに仕事をし、外敵から守ってくれるが、同時に不器用で危険な存在でもあり、適切に制御しないと主人を破壊する威力を持つ。

従来の科学が「全面的に善なる存在」「実在と直結した無謬の知識という神のイメージ」であると科学者によって実態以上に美化してふりまかれた

ものを、コリンズとピンチは間違いだと訂正するために「ゴレム」を持ち出し、善悪両面があり、日々成長している「ゴレム」こそが「科学」の本当のイメージであると主張したわけである。選択肢を見ると、そうした説明になっているのは③だとわかる。

残りの選択肢を見ておこう。

①は、後半の「現実の科学は人間の能力の限界を超えて発展し続け将来は人類を窮地に陥れる脅威となり得る存在である」が間違い。善的な面が全く書かれていない。

②は、後半の「応用することが容易でない存在である」と科学をとらえていることが間違い。応用できるかどうかではなく、適切に制御しないと主人を破壊する威力を持つのが科学である。

④は、科学を「幻滅の対象にもなり得る存在」と捉えているので×。本文に全く書かれていない内容だ。

⑤は、後半で科学のことを「人類に災いをもたらす存在」とのみとらえていて、正解の③のように、「人類に寄与する」一面について触れられていないので×。ゴレムは善悪両面あることが大切であり、コリンズとピンチはそれを主張したかったのである。

正解　8　③

問5　理由説明問題　標準

傍線部D「にもかかわらず、この議論の仕方には問題がある。」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを一つ選べ。

ここでは、**コリンズとピンチの主張に対して筆者が異を唱えている点**に気を付けたい。というのは、筆者は第11段落まで、コリンズとピンチの主張を肯定している論調であった。しかし、この第12段落と第13段落では、筆者はコリンズとピンチに対して疑問を呈し、「『ゴレム』という科学イメージはなにも科学社会主義者が初めて発見したものではない」「歴史的にはポピュラーなイメージといってもよい」「科学者の一枚岩という『神話』を掘り崩すのに成功はしたが、その作業のために、『一枚岩の』一般市民という描像を前提にしてしまっている」とコリンズとピンチをやや厳しく非難している。

最終的な結論として、筆者は、コリンズとピンチの最大のミスは、一般市民が科学の「ほんとうの」姿を知らないという前提に立ち、知っているのは科学社会学者であると考えている点であり、それは彼らが批判した従来の科学者となんら変わらないと批判している。そうした内容を正確に説明している選択肢は、④。

①は、後半の「多くの小説家も……一枚の岩のように堅固な一般市民の科学観をたびたび問題にしてきたという事実を、彼らは見落としている」が×。彼ら以前の多くの小説家がどういう視点を持っていたかということはここでは関係がない。

②は、前半の「一般市民自らが決定を下せるように、市民に科学をもっと伝えるべきだと主張してきた」が、まるで逆の説明になっていて×。後半もおかしい。一般市民はほんとうの科学について無知であるという前提に立ったのがコリンズとピンチである。

③は、後半の「多くの市民の生活感覚からすれば……専門家の示す科学的知見に疑問を差しはさむ余地などない」という説明が×。「一般市民と専門家」という図式が問題なのではない。

④は、前半～中盤まで本文にのっとっており問題ない。そして、後半の「一般市民は科学の『ほんとうの』姿を知らない存在だと決めつける点において、科学者と似た見方である」という説明が、筆者の最も言いたいことであり正解だ。

⑤は、前半は本文にのっとっているが、後半の「科学知識そのものを十分に身につけていないため、科学を正当に語る立場に基づいて一般市民を啓蒙していくことなどできない」という説明は×。まるで本文に書かれていない内容だ。

正解　9　④

問6　文章の表現と構成・展開を問う問題　(i)基本　(ii)基本

(i)この文章の第1～8段落の表現に関する説明として**適当でないもの**を一つ選べ。

「適当でないもの」と言う点を見落とさなければ、「消去法」で解ける。しかも今回の問題は比較的容易な内容であった。

③は、第6段落の「コリンズとピンチの処方箋」についての説明だが、二人の主張が「極端な対症療法である」とは考えられないので×が付く。**問4**以降で見てきたように、コリンズとピンチは科学の「ほんとうの」姿を提示したかったのであり、単なる「極端な対症療法」をしたかったのではない。×が付くので、これが正解。

他の選択肢は、説明として特に問題ない。

正解　10　③

(ii)この文章の構成・展開に関する説明として**適当でないもの**を一つ選べ。

(i)と同様、「適当でないもの」と言う点を見落とさなければ、「消去法」で解ける。

①の説明で、「第1～3段落では十六世紀から二十世紀にかけての科学に関する諸状況を時系列的に述べ」とあるが、第2段落で第二次世界大戦後～二十世紀後半について述べた後、第3段落で「十九世紀から二十世紀前半にかけては」と時代を戻って説明しており、「時系列」になっていないので×。

他の選択肢は、説明として特に問題ない。

正解　11　①

第2問　小説　野上弥生子「秋の一日」

［総　括］

第2問の小説は四年連続で女流作家の作品が出典となった。作者の野上弥生子は、二〇〇九年のセンター追試験の第2問で「笛」が出題されたことがある。ページ数は減ったが（8ページ→7ページ）、文字数は昨年とほぼ同じ（約四八〇〇字）で、設問数も昨年通りであった。ただ、書かれた年代が一〇〇年以上前の大正時代（一九一二年発表）であるため、現代の受験生としては、場面状況を正確に追い、登場人物の心情を読み取るのがやや難しかったかもしれない。

前書きが四行あり、主人公の「直子」と彼女を取り巻く状況の説明がある。登場人物はさほど多くはないものの、直子を軸とした人物関係としては、彼女の夫と子供、子供を世話してくれる女中、そしてかつて友達であった淑子さんなどが登場し、そうした人物関係や場面状況を正確に把握しながら読解していくと、それなりに時間がかかる。また、問いのほとんどが心情問題であることも解答するのに時間がかかる要因になったと思われる。

問1の語句の問題は、「本文中における意味」を問われているが、いずれも辞書に載っている慣用表現であり、語彙力が試された。**問2**は場面状況を正確に把握した上で、心情を捉える問題。**問3**は「微笑」の背後にある心情を問う問題。**問4**も比喩表現の背後にある心情を問う問題であり、選択肢も長いので検討を要する。**問5**は傍線部が無い設問で、選択肢の指し示すものが本文のどの場面・内容にあたるかの把握に時間がかかるため、丁寧に解かなければならない問題。ここで時間を消費した受験生が多かったと思われる。**問6**は適当でないものを2つ選ぶ出題形式であり、選択肢に書かれた内容を本文で確認して解く問題であった。

［解　説］

問1　語句問題　(ア)　基本　(イ)　標準　(ウ)　標準

傍線部(ア)〜(ウ)の本文中における意味として最も適当なものをそれぞれ一つずつ選べ。

「本文中における意味」を問う問題ではあるが、あくまで「**辞書の定義的意味を優先して解く**」というのは例年通りの鉄則パターン。今年の問題に限らず、こうした慣用表現には日ごろからいろいろな媒体を通して慣れ親しんでおき、語彙力を増強してほしい。下手に文脈に戻して判断すると間違える可能性がでる問題が出題されている。

(ア)の「呆っけに取られた」は、「意外なことに出会い、驚き呆れる状態」のことで、①「驚いて目を奪われたような」が正解。

(イ)の「生一本」は、「①純粋でまじりけのないこと。また、そのもの。②純真で、ひたむきに一つのことに打ち込んでいくこと」の意で、ここでは②「純粋」が正解。

(ウ)の「あてつけがましい」の「あてつける」は、「他にかこつけて相手の悪口や皮肉を言う」の意味。「-がましい」は動詞や名詞について形容詞をつくり、その物事や状態に似ている意を表すので、①「いかにも皮肉を感じさせるような」が正解。

正解　(ア) 12 ①　(イ) 13 ②　(ウ) 14 ①

問2　心情説明問題　標準

傍線部A「誠に物珍らしい楽しい事が急に湧いたような気がして」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを一つ選べ。

登場人物や前書きも含めた傍線部までの話の流れを正確につかんで解く問題。特に、傍線部にいたる直接的な原因となった直前の内容を見落とさないことだ。

前書きから傍線部までをまとめると以下のようになる。

1　主人公の直子は長らく病気で臥せっていた。しかし、病が快復したら夫がくれた土産の手提げ籠を持ってピクニックに出掛けることを楽しみにしていた。

2　病気が快復せぬまま何年か過ぎ去ったあと、今年の秋、珍しく直子は元気だった。

3　しかし、特別に行き度いと思う処もないまま過ごし、夫から展覧会の話を聞いた直子だったが、**出掛けようと思ったのは全く偶然な出来心**であった。

4　直子は**夕暮の西の空に、明日が晴れた秋日和になりそうな気配を感じ**て、自分も展覧会に行き、そのあと上野あたりでピクニックを楽しもうという気になった。

こうした要素をきちんと確認していくと正解は④とわかる。選択肢を要素に分けて○×していき、×が付いたものを落としていけば確実に正解にたどり着けるはずだ。

①は、「絵の鑑賞を夫から勧められてにわかに興味を覚え」が×。前述のポイント3・4に反する。
②は、「全快を実感できる絶好の日になる」とは本文に書かれていないので×。直子の病が全快したとはっきり書かれているわけでも、またそれを実感しに出かけるわけでもない。
③は、「出掛けたいのに行き先がないと悩んでいた」わけではなく、また、「夫の話から久しぶりに絵の展覧会に行こう」と思ったわけでもないので×。
④は、前述のポイントを過不足なく押さえていて正解。特に傍線部の直接的な原因である4のポイントを押さえられている。
⑤は、「展覧会の絵を早く見に行きたかった」「子供は退屈するのではないかとためらっていた」「絵を見た後にどこか静かな田舎へ行けば子供も喜ぶだろうと突然気づいて」など、すべての要素に×が付く。

正解　15　④

問3　心情説明問題　標準

傍線部**B**「この微笑の底にはいつでも涙に変る或物が沢山隠れているような気がした」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを一つ選べ。

問2に引き続き、書かれている5W1Hを正確に押さえ、選択肢を要素に分けて○×を付けていこう。16行目以降～傍線部までをまとめてみよう。

1　朝早く、籠にたくさんの食べ物を入れ、子供と女中を伴って上野に出かけた直子は、久しぶりに秋の公園を散歩する。
2　小学校の運動会に出くわした直子たちは、物珍しいものを見る気持ちで立ち止まって眺めていたところ、ふと訳もなく涙が熱くにじみ出てくる。
3　この涙は、直子が久しく癖になっていたもので、**何に感じたと気のつく前に、ただ流れ出る涙**（具体的な説明としては、35～38行目）であり、今回は目の前の子供たちの踊っている有様を見て胸に沁み、涙が出た。
4　直子はそんな心持のまま、女中に背負われながら踊りに眺め入っている自分の子供の姿を見て微笑む。

この流れの後に傍線部**B**が引かれ、直子の心情が問われている。選択肢を見ていこう。

①は、「病弱な自分がいつも心弱さから流す涙」とあるのが間違い。涙の原因は「心弱さ」であるのではなく、直子本人にもわからないのである。

②は、「無邪気な子供の将来を思う不安から流す涙につながる」とあるが本文には書かれていない。センター小説において、本文に根拠がないのに主観的想像で勝手に正しいと判断してしまってはいけない。

③も、「純真さをいつまでも保ってほしいと願うあまりに流れる涙に結びつく」とあるが本文には全く書かれていない。②同様、主観的な読みによるミスに注意が必要だ。

④は、「さまざまな苦労をして流した涙の記憶と切り離せないものがある」が×。直子は涙を流すのが癖ではあるが、その原因が「さまざまな苦労」であるとは書かれていない。

⑤は、前半は問題なく正しい。後半の「純粋なものに心を動かされてひとりでにあふれ出す涙に通じる」というのも、ポイント3の「**何に感じたと気のつく前に、ただ流れ出る涙**」と対応しており、これが正解。

正解　16　⑤

問4　心情説明問題　応用

傍線部C「こうした雲のような追懐に封じられている」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを一つ選べ。

この問題も、**問2**、**問3**に引き続き、書かれている5W1Hを正確に押さえ、選択肢を要素に分けて○×を付けていこう。61行目以降～傍線部までをまとめてみよう。

1　「幸ある朝」の前に立った直子は、動揺した感情のもと、友達だった二級上の淑子さんのことを思い出す。

2　その昔、まだ直子も淑子も学生だったとき、友人たちと暑中休暇中の二週間ほどを一緒に過ごそうという提案がなされた。しかし、淑子だけは参加を断ったため、その会の話は流れてしまった。

3　淑子が会の参加を断った理由は後でわかった。画家である義兄の「造花」というタイトルの絵のモデルとなっていたのだった。

4　今、直子は「幸ある朝」の絵の前に立って十年近く前のその頃のことを思い出す。ただ、淑子さんは結婚後、間もなく亡くなっていた。

5　十年前のお転婆だった友人たちや自分の姿を思い出すにつれ、今の自分が全く別人となってしまったのを複雑な思いで見つめ、また過去の姿も価

値なく見すぼらしいのを悲しんだ。

ここでは第1問「評論」の**問3**でも見たように、まずは傍線部中の指示語の指し示すものを正確にとらえることだ。まず、傍線部の冒頭が「こうした」という幅広い指示語であることに着目する。

●傍線部中、あるいは傍線部の直前に指示語がある場合、まずは指示語問題として解く。

これはセンター現代文で最頻出であるにとどまらず、どの大学の現代文においても重要な解法の鉄則であり、大切なパターンである。「こうした」という指示語は「これ」や「それ」などと違って、複数の具体的な内容を指し示すものだ。そのうえで「雲のような追懐」という比喩（直喩）が具体的に何を指すかをしっかりとらえて正解してほしい。

選択肢を見ていこう。

①は、「（学生時代は）ささいなことにも心を動かされていた」⇔「病気が自分の快活な気質をくもらせてしまった」というのは事実かもしれないが、**「雲のような追懐に封じられている」という比喩は、「悲喜こもごも（マイナス・プラス両方）の感情にとらわれている」**はずなので、結論がマイナスの「沈んだ気持ち」になっている点で×。

②は、ポイントの流れを含み、直子の「悲喜こもごも（マイナス・プラス両方）」の説明があり、**「もの思いから抜け出すことができずにいる」という説明も「封じられている」という傍線部の言い換えになっており**、正解。

③は、「親しい友人であった淑子さんと自分たちとの感情がすれ違ってしまった出来事」というのが事実と反する。したがって、「当時の未熟さが情けなく思われて、後悔の念に胸がふさがれている」というのも×。

④は、「もうこの世にいない淑子さんの姿がかすんでしまっていることに気づいて、懸命に思い出そうと努めている」が×。本文では「ほんの昨日の出来事」のように思え、直子の脳裏に当時の姿が鮮明によみがえってきている。

⑤は、「女学生の頃の感覚を懐かしみ、取り戻したい」とは書かれていないので×。これも本文に根拠がない選択肢なので、きっちり切り捨てておきたい。

正解　17　②

問5　心情説明問題　応用

本文には、自分の子供の様子を見守る直子の心情が随所に描かれている。それぞれの場面の説明として最も適当なものを一つ選べ。

本文に傍線が引かれていないので、選択肢の内容が本文のどこに書かれているかを探したうえで正誤を判断していく問題。ある意味「新傾向」といえる問題であるが、内容合致問題と考えて、「消去法」で対処していくのがベストだ。

選択肢①～⑤の内容は時系列になっているので、問2～4を解く際に検討した内容が含まれている。素早く正確に処理していきたいところだ。

①の、「念願だった秋のピクニックを計画する余裕もないほどに、子育てに熱中する直子の母としての自覚」というものは本文からは読み取れない。問2で見たように、この秋のピクニック自体、直子の偶然の出来心である点を考えてもこの説明はおかしい。

②は、前半は正しいとしても、後半の「長い間病床についていたために、ささいなことにも暗い影を見てしまう直子の不安な感情が暗示されている」というのは本文からは読み取れないので×。

③は、「子供の新鮮な心の動きによって目新しいものになっている」とあるが、本文では33行目に「直子も何年かぶりでこんな光景を見たので、子供に劣らぬもの珍らしい心を以て立ち留まって眺めていた」とあるので間違った説明といえる。

④は、まず前半部分は問題なく正しい。「美術品の中に自分の知っているものを見つけた子供が無邪気な反応を示す様」というのは、50～53行目に書かれている子供の様子と対応していて正しい。最後の「周囲への気兼ねなく楽しむ直子ののびやかな気分」というのも、本文の「直子も女中も一緒に笑い出した」と対応しており問題ない。これが正解。

⑤は、前半部分は本文のラストシーンと対応しており問題ない。後半の「突然現実に引き戻された直子が、娘時代はもはや遠くなってしまったと嘆く様」というのは本文に全く書かれていないので×。97行目までしばらく「追懐に封じられて」いた直子は、子供の泣き声で現実に引き戻されたが、それ以降は女中と子供とのやり取りに終始しており、娘時代云々という感情は一切書かれていない。

正解　18　④

問6　表現の特徴・叙述の説明問題　基本～標準

この文章の表現に関する説明として**適当でないもの**を二つ選べ。（順不同）

「適当でないもの」と言う点を見落とさなければ、「消去法」で解ける。今回の問題は、一つは比較的容易に正解できるが、もう一つは確実に見極めたうえで正解にたどり着いてほしい。**不安が残る選択肢がある場合は、いったん正誤の判断を保留にしておき、二度目に確実に判断するという二段階選抜をしていこう。**

①は、小説だけでなく評論などにもある「語句に付された傍点」の表記上の働きについて述べられており、説明として特に問題はない。

②は、「22行目以降の落葉」の箇所を見ると「灰色、茶色、鈍びた朱色」と色彩語が用いられており、さらに「さくさくと鳴る」と擬音語が加えられているので、「視覚・聴覚の両面から表現されている」という説明は正しい。46行目以降の日本画の描写の箇所の説明も問題ない。

③の説明は、まったく問題なく正しい。

④は、43行目「直子は本統は画の事などは何にも知らぬのである」、44行目「画の具の名さえ委しくは知らぬ素人である」という描写は、ただ直子の知識の無さを言ったものであり、「直子の無知を指摘し、突き放そうとする表現」とまでは言えない。絵の好きな夫のアドバイスを素直に聞き入れている様子や、画の好きな子供がどう鑑賞するかに関心を持っている直子の様子からも、「突き放そうとする表現」とは言えないので間違った説明だ。これが一つ目の正解。

⑤は、55行目の表現が「絵画や彫刻にかたどられた人たちの、穏やかな中にも生き生きとした姿を表現したもの」とあるが、絵画や彫刻が「品定め」から逃れられたからといって、それが「穏やかな中にも生き生きとした姿を表現したもの」であるとまで言い切れるかは不明。センター小説では本文に根拠がないものは×、という鉄則から言うと「適当でない」と言えるレベルと判断できる。ただし、不安な人は、この選択肢はいったん保留にしておいたほうがいいだろう。

⑥は、「68行目以降の場面では、女学生時代の会話が再現されている」という説明は正しい。また、「彼女とのやり取りが昨日のことのように思い出されたことが表現されている」という説明もまったく問題ない。

「適当でないもの」という点では、④がすぐさま正解と分かり、もう一つの正解としては残りの選択肢を検討した結果、①・②・③・⑥が問題なく正しい説明であるのに対して、⑤が「適当でない」と言えるレベルのものなので、これが二つ目の正解となる。

正解　19・20　④・⑤（順不同）